

第2節

海成段丘部 における水田開発 と薪炭林利用

1. 海成段丘上の農地と水利

金銀山の開発により急激に成長した相川の食料を確保するため、他国からの米の流入とともに、島内各地、特に外海府で盛んに水田開発がおこなわれた。そのなかでも相川の北端と南端に位置する下相川地区と鹿伏地区は、コメや野菜、魚といった食料を都市相川に供給する超近郊農業の役割だけでなく、相川に隣接する地域であるがゆえに鉱山労働力としての役割も担っており、外海府のなかでも相川金銀山の盛衰に伴いもっとも変動の激しい地域だったといえる。

こうした地域の特徴を把握するため、現地での実地踏査とヒアリング調査を平成23年7月から平成24年2月にかけておこなった。なお、ヒアリング調査は、下相川地区では、益田アサ氏（昭和5年＝1930生まれ）、三木ハル氏（昭和6年＝1931生まれ）、山本義昭氏（昭和25年＝1950生まれ）の3名に、鹿伏地区では、岩倉幸男氏（昭和24年＝1949生まれ）、佐藤重雄氏（昭和29年＝1954生まれ）の2名に個々に聞き取りを実施した。

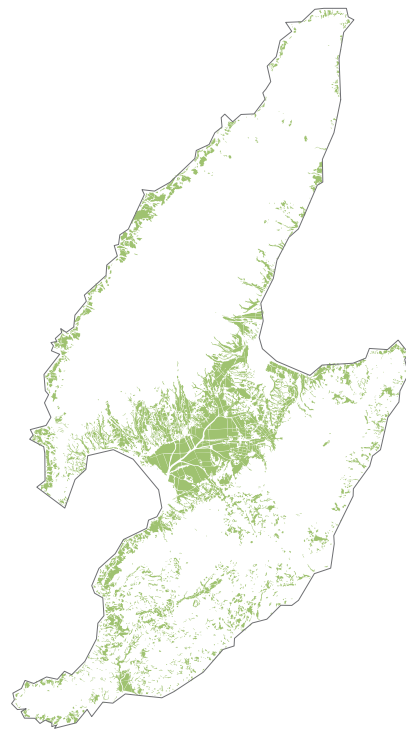


図4—14 佐渡島の水田分布図

2. 下相川地区の水田開発

(1) 海成段丘上の開発史

慶長5年（1600）、佐渡代官に任ぜられた大久保長安は上町台地上に鶴子にあった陣屋を移すことを指示し、相川全体の鉱山都市としての都市計画をはじめた。慶長8年に佐渡奉行所敷地を買い取り、そこに住む百姓らを下相川の上位段丘にある約8町歩の土地を代替に移動させて、農地を開墾させたといわれている⁽⁵⁾。

下相川に与えられた土地は人見、群居^{ひとみむれい}という土地で、^{ひらき}開、コブラともいわれている。水田は標高100～140mにかけて築かれたが、標高100m以上の海成段丘上を水

田化している場所は佐渡でも稀で、灌漑のための用水路の設置には鉱山の技術が転用されたと考えられている。

ただし、平成17年頃に水源であった溜池に漏水問題が発生し、下相川の水利組合は協議のうで解散してほとんどの農業従事者は一斉に耕作をやめた。現在は益田アサ氏、山本義昭氏、堀部市太郎氏の3名が沢水などを利用して部分的に耕作を継続している。

(2) 水利の仕組み

下相川の水田は、地区の南側を流れる水金沢から水路を引き、溜池にため、その水を各水田に配っていた（図



図4-15 昭和41年(1966)当時の下相川の水田
右下に漏水前の溜池が、水田中央に「風の宮」がみられる。航空写真からは871枚の水田が確認できる。



図4-16 下江(シタエ)の修理事業

4—15)。水金沢の取水口から溜池まで引かれた水路は、途中の滝を境に、上部を「大江」、滝より下部を「下江」と呼んだ。大江の補修作業は「オオエアゲ」とよび、雪が解けた5月中旬ごろに、下江の補修は3月末からおこなっていた(図4—16)。

(3) 相川と風

下相川の海成段丘の中心部にこんもりとした小山がある。この小山の中腹に石の祠があり、地元で「風の宮」「風の神さん」と呼ぶ風の神が祀られている。この小山は下相川の中村家の所有地で、「カジヤの山」と呼んでいたという。毎年、二百十日の雑節の際に男性は風の宮に集まり、お神酒を供え、隣接する中村家の小屋で宴を設けていた。この行事は20～30年ほど前までおこなわれていたようである。一方、女性は宗派により戸河神社や百足山大権現下の御堂に集まり神事や念仏を唱える。こ

らは現在も続いている。二百十日は季節の移り変わりの目安となる季節点で、この時期以降は台風が発生して荒れやすい。相川のなかでも風が当たりやすい立地にある下相川ならではの祭事であろう。

(4) 相川の新田開発の価値と課題

下相川の旧水田部は、現状ではススキが繁茂し、一部雑木の生育もみうけられる状態になっている。かつての耕作者の高齢化も進み、耕作を再開することは容易ではない。益田アサ氏によると、水利組合解散以降、現在も耕作を継続している水田ではカエルやイモリなどの生き物が激減しているという。一方で、旧水田部は草本類に覆われているものの棚田状の地形は残存している。そこには草本類をベースとした海成段丘上の生態系が成立している可能性も考えられる。

3. 鹿伏地区の水田開発

(1) 海成段丘の開発史

i) 畑作と漁業の村

鹿伏は相川の近郊村として、相川から様々な影響を受けながら今日に至った。

元禄検地からは、集落の中央を流れる小川、中津川周辺から観音寺の間に家・屋敷が集中している様子がわかる。鹿伏にはオオヤといわれる家が2軒あり、1軒は佐藤善兵衛家、もう1軒は池田清蔵家である。両家とも屋敷を2筆持っており、中津川を挟んで隣接していた。

元禄検地による両者の耕地所有状況を見ると、善兵衛家は田畑あわせて3町歩ほどの内、畑が2町4反と大部分を占め、田は7反たらずである。清蔵家では田畑とも3、4反歩で農業規模は小さい。両家とも相川の近郊村として、畑作や磯漁などを生業としていたようである。

このように、海成段丘上の土地は水利の関係からほと

んどが畑地で、鉾山都市相川への野菜供給地として重要な役割を担っていた。ただ、集約的な近郊農業ではなく、大根などのほかに、大麦、小麦、そば、大豆、小豆などの雑穀が主な作物であったようである。

ii) 入植者による近世新田開発

一方、元和2年(1616)、越前から相川へきた永宮寺は門徒を連れてきたが、そのひとつに鹿伏に移った岩倉家がある。岩倉家の古文書によると、元和2年、越前岩倉から相川へ入り、翌3年、奉行所より鹿伏の^{ひらき}開墾許可をとったとある。岩倉家は越前の自作農家であったからか、鹿伏の段丘上ですぐさま新田開発をはじめた。鹿伏の高位段丘はこれら一族により水田として開発された。

iii) 大規模溜池の築造による近代水田整備

近代に入ると開析谷を土堰で堰きとめて溜池を築造



図4—17 下相川の旧水田部



図4—18 鹿伏の水田

する技術が佐渡に導入された。鹿伏地区でも大正11年(1922)から昭和9年(1934)にかけて赤松・長墓・鹿伏耕地といった名前の大規模溜池が築造され、受益面積を26.5町歩まで拡大した。鹿伏の海成段丘上の土地利用はこの事業により大きく変化し、現在みる一面の水田が形成された(図4-18)。

(2) 各段丘面の開発と水利系統(図4-19)

2万5000分1地形図レベルで地形分類をおこなった場合、鹿伏の海成段丘は段丘Ⅶ面と段丘Ⅸ面から成る(第2章第1節参照)。ただし、現地調査を実施するとⅦ面中央部に微細な段丘がみられ、詳細には2つの段丘面から成ることがわかった。そこで、本節ではこれら3つの海成段丘をそれぞれ、高位段丘、中位段丘、低位段丘とした。高位段丘面は標高80~90mにかけて、中位段丘面は標高60~80mに、低位段丘面は標高30~50mに位置する。

i) 高位段丘面

元和3年(1617)に入植した岩倉家を中心に近世に開拓が進んだのが高位段丘面で、「^{ひらき}開」と呼ばれている。岩倉家は30年ほど前までこの段丘面上の屋敷に住んでいたが、現在は麓の相川下戸村に居を移している。

この段丘面の水利の仕組みをみると、崖線沿いを中心

に池があり、そこからいくつかの田に水を配り、余った水は北側や南側の谷筋に落とす、という方法で灌漑していることがわかる。池は個人で所有し、用排水の作業も個人でおこなう。区画整備は進んでいるものの、近世に開拓した当時の土地利用や水利の仕組みが非常に残っている。

この段丘面では安定した水量を確保するため、昭和26年に高位段丘面の鹿伏土地改良組合(岩倉家、萩野家、池田家の個人耕作者で組織)と中位段丘面の鹿伏耕地水路組合、赤松水路組合と合同で堀切水路組合を組織した。堀切水路組合は高位段丘面の南東に位置する沢から新たな水路を引き、その水を鹿伏土地改良組合が3割、鹿伏耕地水路組合が4割、赤松水路組合が3割の割合で取水している。取水は各組合1日単位で交替し、午前12時(午後0時)に各組合の江番(エバン：水路の管理役)が導水部を変える。高位段丘面に位置する鹿伏土地改良組合では堀切水路の水を沢水や湧水で自然に貯水する個人所有の溜池に入れ、その水利系統を崩すことなく補完的な役割を担っている。

ii) 中位段丘面

中位段丘面は、近代に入り建設された2つの巨大な灌漑用溜池(鹿伏耕地・赤松)により水田化された土地で

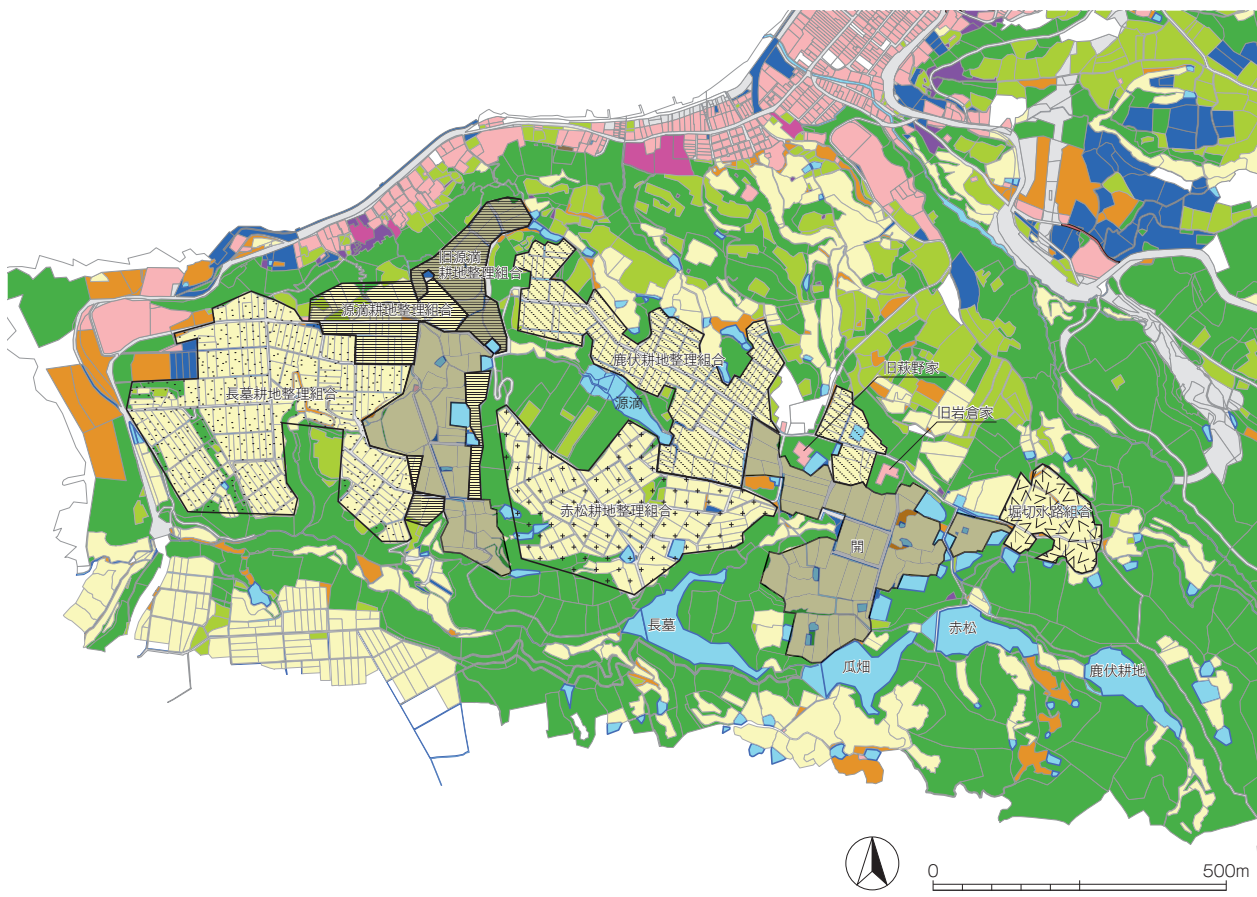


図4-19 鹿伏地区 海成段丘田 水利及び受益地

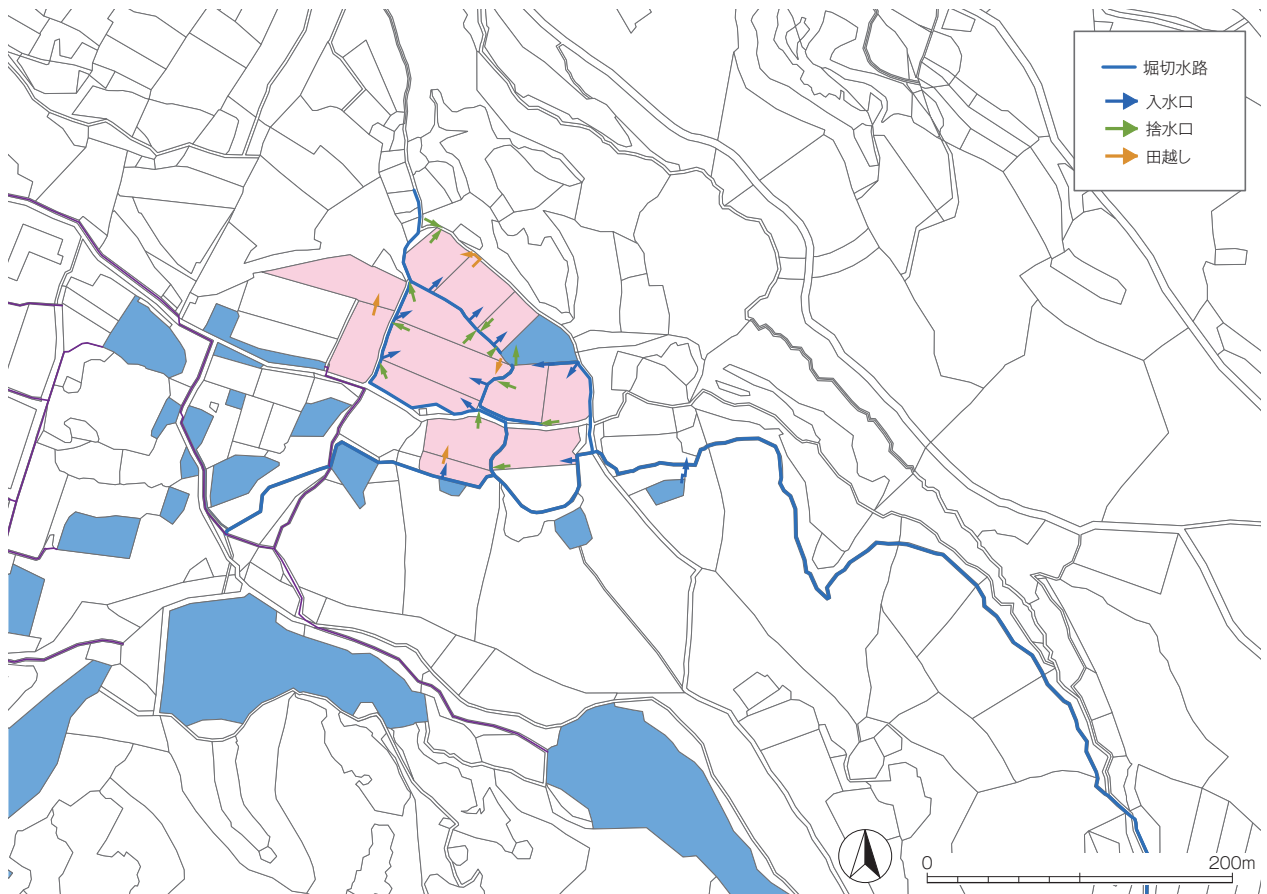


図4—20 鹿伏地区 海成段丘田 掘切水路組合水系図

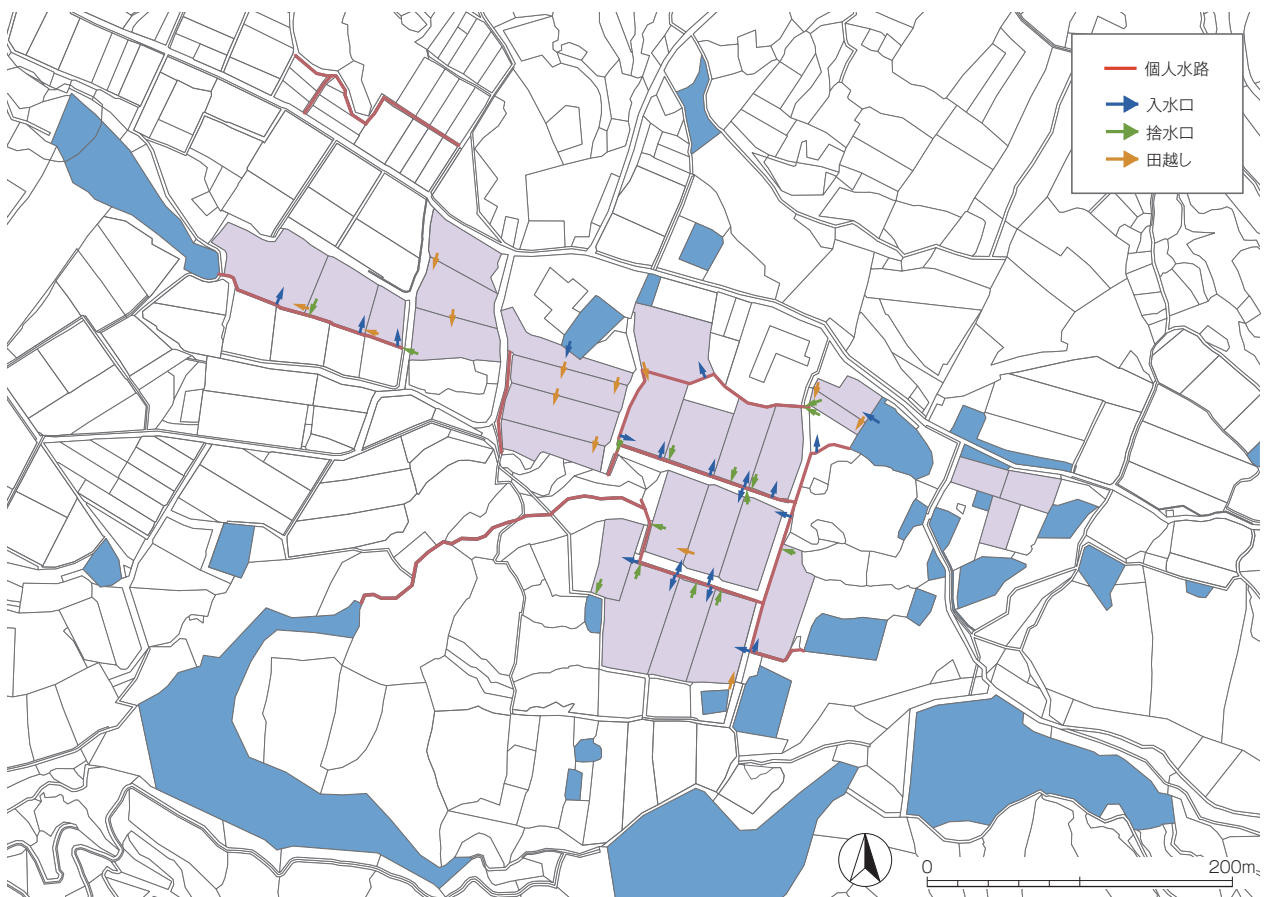


図4—21 鹿伏地区 海成段丘田 開周辺水系図

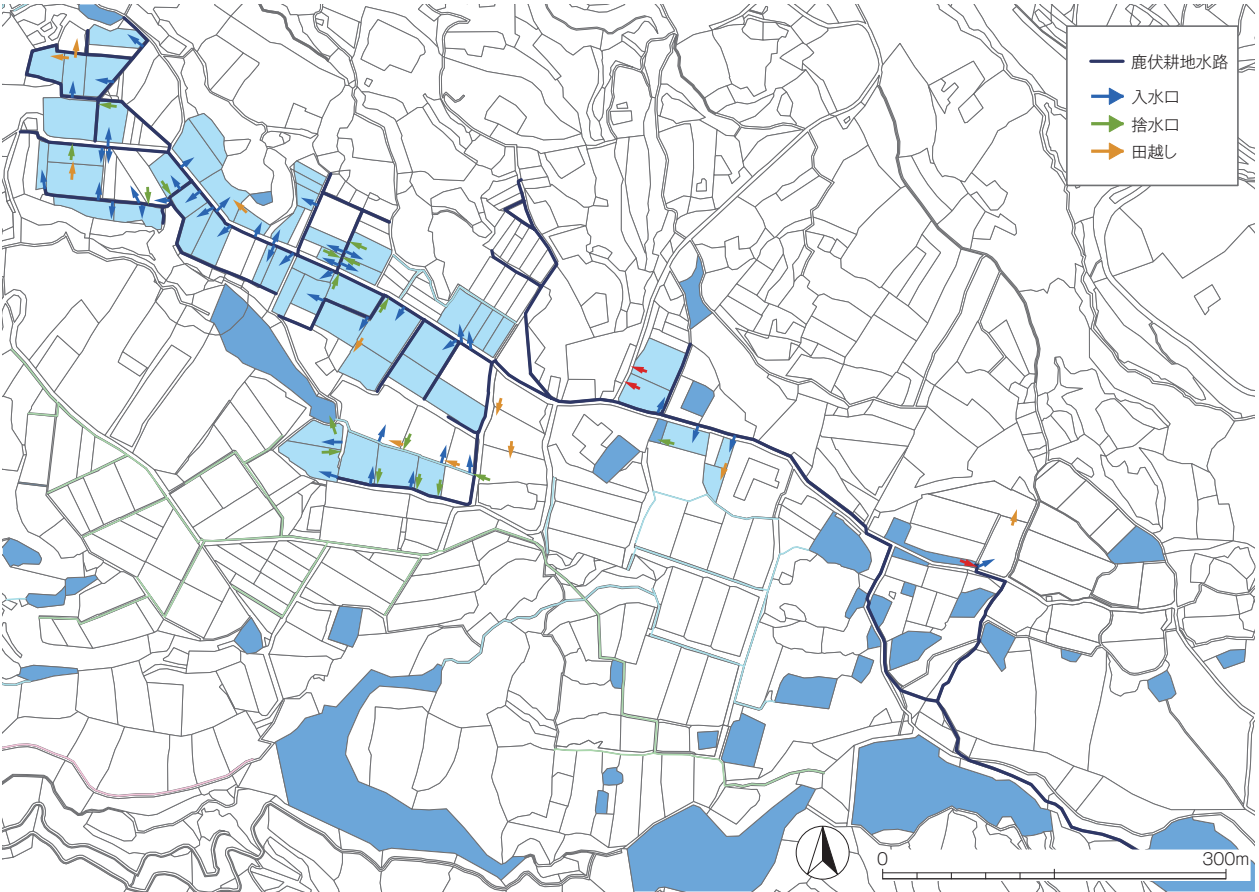


図4－22 鹿伏地区－鹿伏耕地水路組合水系図

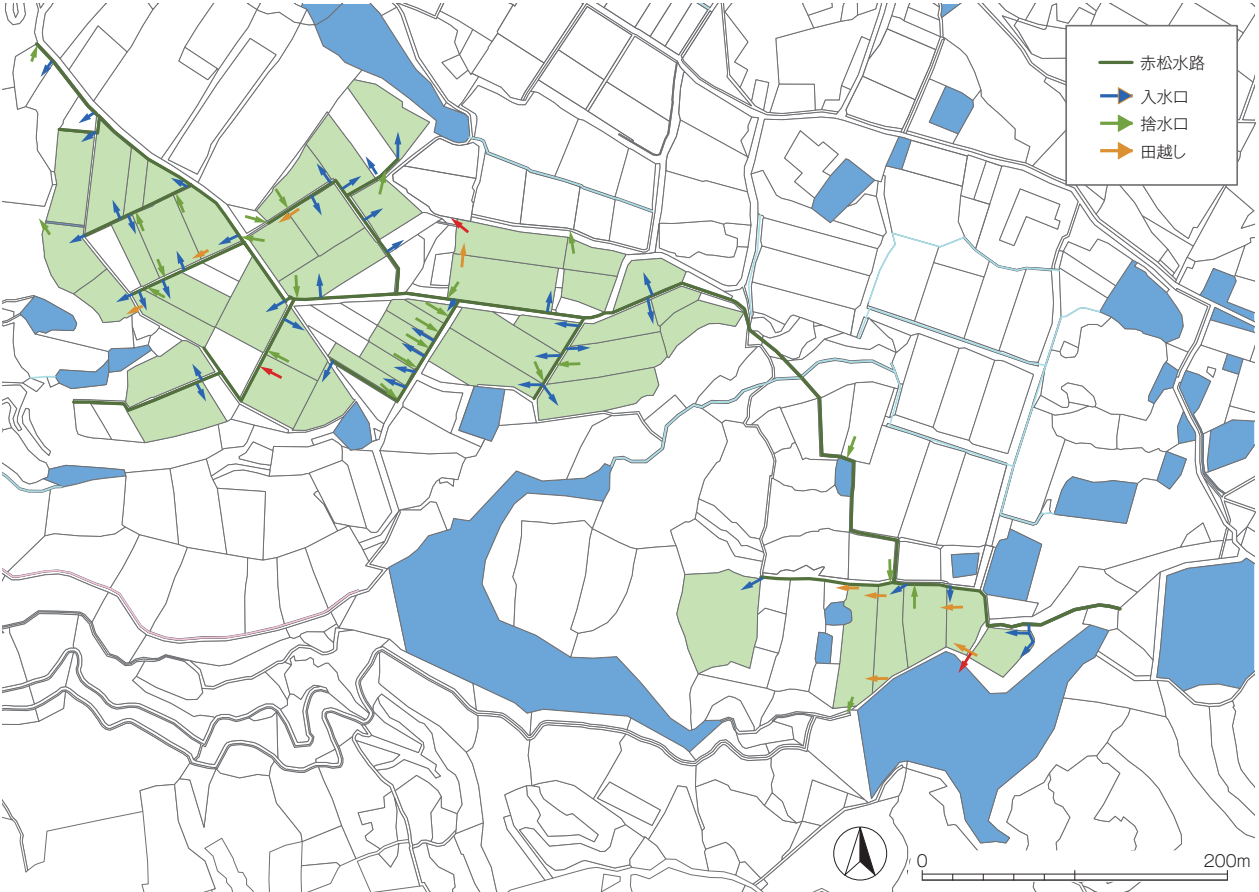


図4－23 鹿伏地区－赤松耕地水路組合水系図

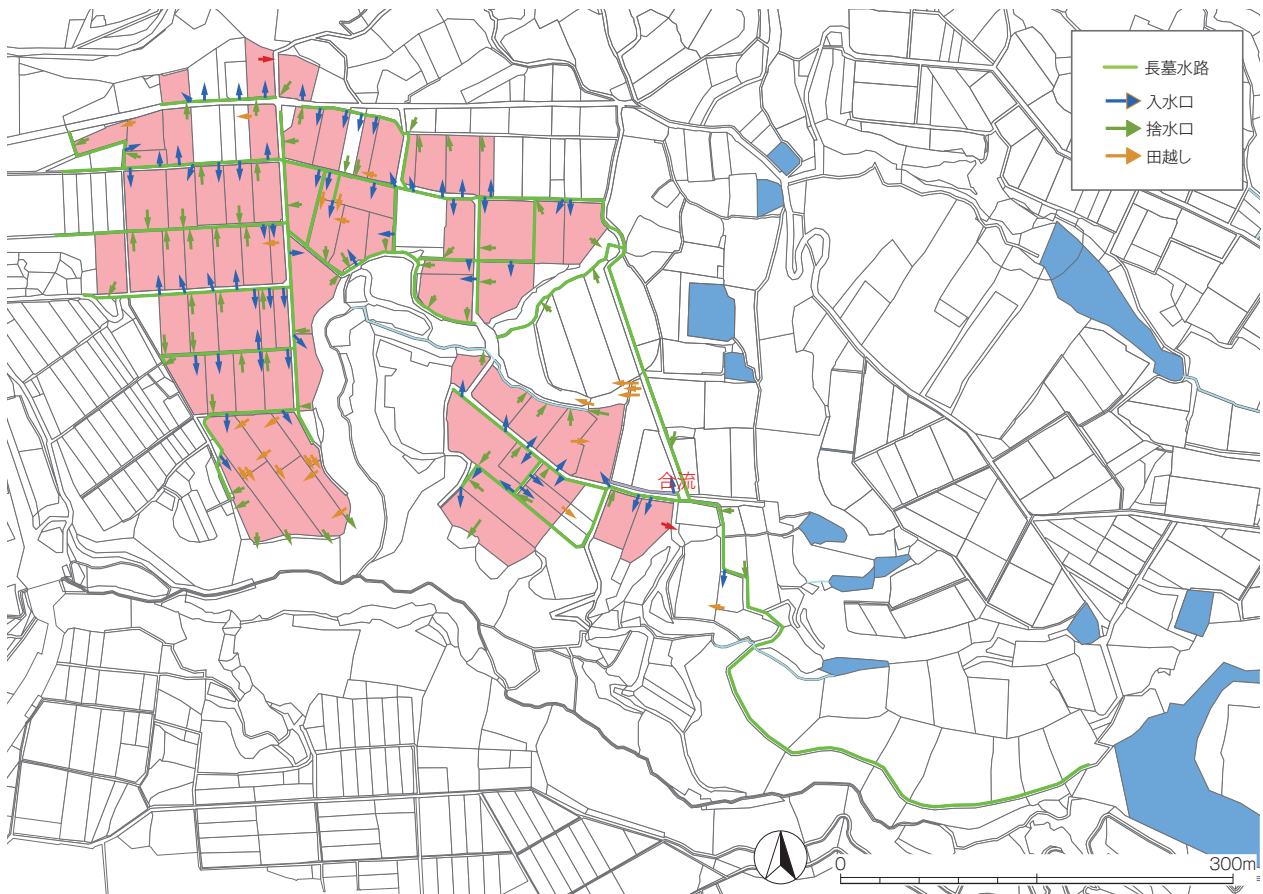


図4—24 鹿伏地区 海成段丘田 長墓水路組合水系図

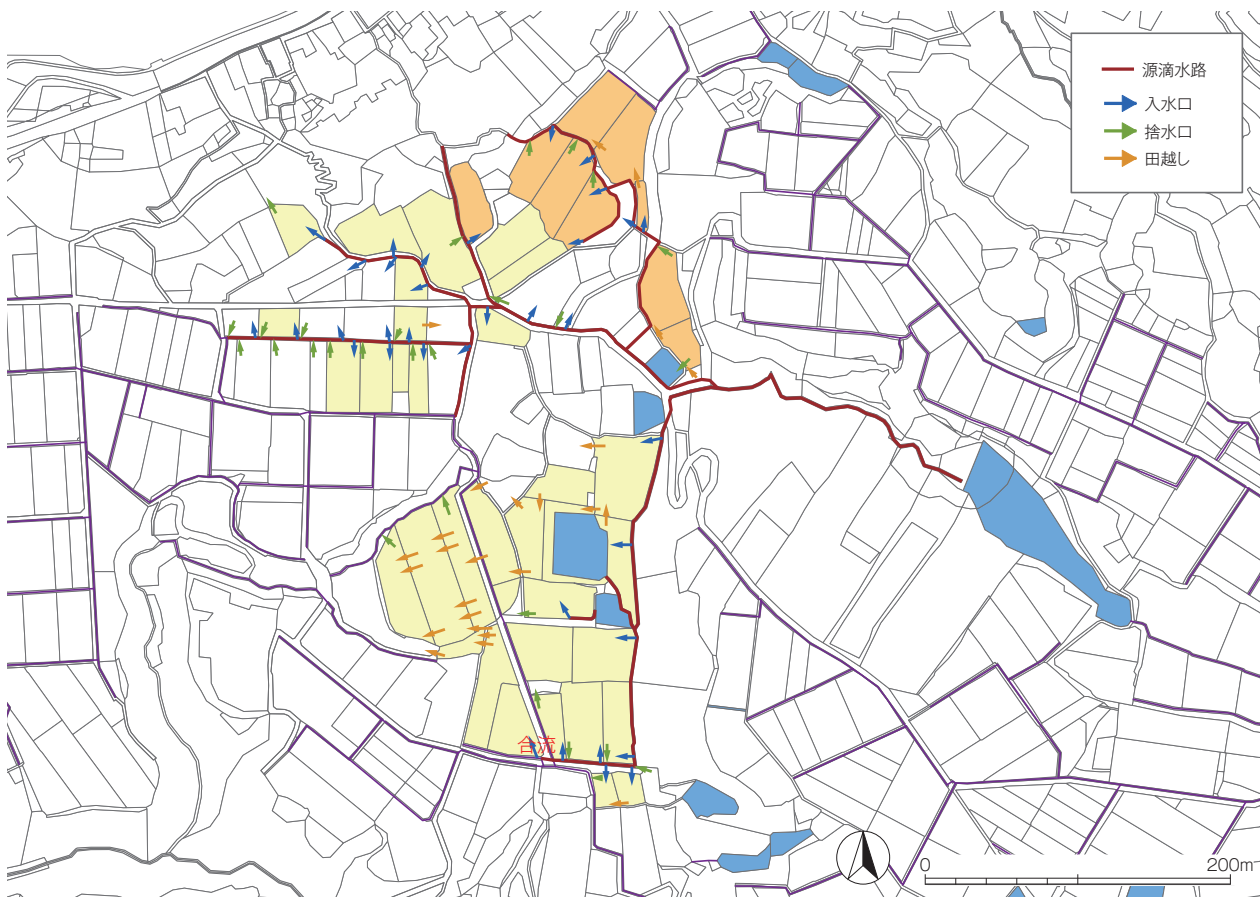


図4—25 鹿伏地区 海成段丘田 旧源滴及び源滴水路組合水系図

表4-2 堀切水路組合の取水の仕組み

1日	☐ 鹿伏耕地水路組合 →堀切水路から鹿伏耕地水系の水路に水を入れる	2日	☐ 赤松水路組合 →堀切水路から赤松の池に水を入れる	3日	☐ 鹿伏土地改良組合 →岩倉家：18時間取水 →萩1日野家：3時間取水 →池田家：3時間取水 （現在は池田家は耕作をしておらず萩野家が計6時間取水している）
4日		5日		6日	
7日		8日		9日	
10日					

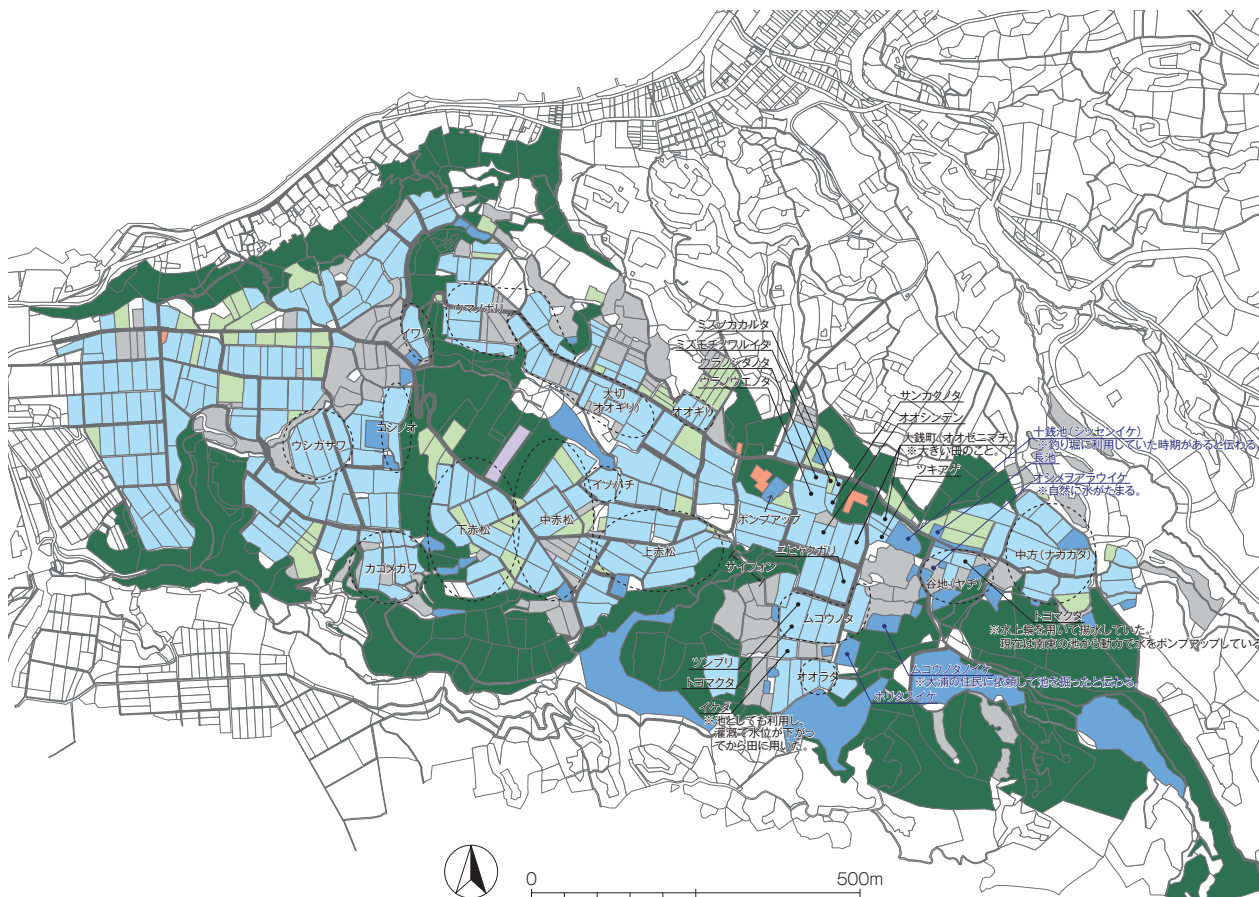


图 4—26 鹿伏地区 海成段丘田 俗称

ある。鹿伏耕地の水が北半分を、赤松の水が南半分を潤す。個人所有の溜池はほとんどなく、水田化前はほぼ畑地が広がっていたと想定される。

iii) 低位段丘面

低位段丘面は北側を源滴という溜池の水が、南側を長墓という溜池の水が潤す。長墓は鹿伏耕地や赤松と同様に近代に入り新たに建設された溜池だが、源滴は元々あった溜池を近代に入り拡大整備したものである。そのため、源滴の水路組合のなかに、旧源滴水路組合とよばれる拡大前の既得権をもつ田がある。

(3) 俗称からみる鹿伏の水田耕作

水田の俗称について、現在の水田耕作者から聞き取りをおこなった。その結果をまとめたものが図4—26である。

俗称地名を全体としてみた場合、俗称をもつ田の分布は高位段丘面に多く、また細かく名付けられていた。中

位段丘面や低位段丘面の近代開発水田は数枚から数十枚の田を含む大きな単位で俗称が付けられていることがわかった。これも水田への開発段階の違いが影響しているものと考えられる。

また、開の岩倉家所有地には「トヨマクタ」と呼ばれる田があり、現当主が小学生の頃までは水上輪を用いてこの田の南東に隣接する池から揚水していた。現在は動力でのポンプアップに切り替わっているものの、かつての水利系統は継承されている。

(4) 鹿伏の海成段丘田の価値と課題

鹿伏は段丘上に立地するため水源に乏しく、用水の確保が困難だったことから水田は約2割にすぎなかった。初期水田としては、古い水利の仕組み（主に個人での用排水システム）が残る旧源滴エリアと、近世に本州からの移住者により開発された開エリアが考えられる。一方で、相川という大消費地（兼肥料供給地）に隣接してい

たため野菜供給地としての役割が大きく、「菜大根半カマド」ということばが残っているように、畑作が盛んな地域だった。

段丘崖に沿った崖下に小規模な溜池を作ることで水田化が進められた開や旧源滴エリア及びその南側一帯では、現在も個人による用排水が継承されている。開には昭和30年代まで水上輪を用いて揚水した田（現在は動力でポンプアップ）もあり、相川金銀山に導かれたひとや技術により耕作が進められた土地といえる。低位段丘

面では耕地整理事業がスタートし、旧源滴エリアを含む一帯の水利システムは大きく変化する予定であるが、高位段丘面の開を中心としたエリアのシステムは今後も継承されていくだろう。

鹿伏の海成段丘田は、初期水田（自然立地の池・湿地を利用）、近世の開拓期水田、近代の大規模開発水田と、相川の影響を受けながら各時代に成立した水田が混在しており、都市相川を語る上で欠かせない土地であると考ええる。

4. 薪炭林の利用

金銀山の経営には大量の木材や木炭が必要となる。木材は坑道内で使う留木、物資の輸送のための船材、都市住民を受け入れるための建築材や焚木などとして、木炭は金銀の製錬のために欠かせない重要な資材であった。急激に膨張していく鉱山都市相川を支える上で、食糧と共に安定的に確保しなければならない必須物資だったといえる。

『佐渡年代記』慶長16年（1611）の条に「自国の山林を伐出することを禁じ、銀山入用の留木・炭・薪など羽州庄内の辺、そのほか近国より積み来たる」とある⁽⁵⁾。この年まで島内の山林は乱伐され、盛んに金銀山に供給されたが、その後は奉行所が管理する「御林（おはやし）」とされた。御林とは現代でいう国有林のことであるが、当時の規制は厳しく、林内での1本の伐採も許可なくしては許されなかった。

こうして佐渡島内の山林は奉行所の管理下に置かれ、下相川の本間又兵衛門などの御用商人が鉱山用資材を買い付けていた。記録によると又兵衛門は海府方面や国中

方面からも炭や木材などの買付けをおこなっていたようである。

明治維新後、御林であった旧幕府の所有地は明治元年（1868）に官有林となったが、同22年に佐渡鉱山が帝室財産に編入されたことに伴い、同23年に帝室所有の御料林とされた。しかしその後、帝室財産を民間事業者売却する動きが顕著となり、同29年に佐渡鉱山が三菱合資会社に、大正13年（1924）には御料林が新潟県に、それぞれ払下げとなった。

明治維新後、御林であった旧幕府の所有地は明治元年に官有林となったが、同22年に佐渡鉱山が帝室財産に編入されたことに伴い、同23年に帝室所有の御料林とされた。しかしその後、帝室財産を民間事業者売却する動きが顕著となり、同29年に佐渡鉱山が三菱合資会社に、大正13年（1924）には御料林が新潟県に、それぞれ払下げとなった。

（恵谷浩子）



図4—27 開の個人所有の溜池（長池）



図4—28 釣り堀にも利用されていたと伝わる溜池（十銭池）

第3節

鉱山・町場・村方の相互関係性

1. 鉱山・町場・村方の関係の特徴

鉱山都市としての相川は、鉱山と海が接する点、上町と下町とで機能が分節されつつも隣接する点、この2点に希有な特徴を有する。石見銀山をはじめとする近世以前に起源をもつ国内の鉱山都市と比較してみると、これらは特に顕著な特徴である。この地理的特性により、非常に独特な自然の構造をもった鉱山都市景観が生み出された。

そこで、本節では、臨海鉱山都市であるがゆえに生まれた相川の鉱山・町場・村方の特質について述べ、その特質が生んだ独特の景観ないし生業について詳述する。

(1) 対となる地形と生活・生業

分節された2つの要素が共存する相川の特徴を、青野季吉は『佐渡』のなかで象徴的に記している⁽⁶⁾。

相川は岩山と外海がぢかに噛み合つてゐるやうな、自然のきびしさを持つてゐる。(中略) 両側に、灣にしては口が開き過ぎてゐる、荒つぽい入海をひかへたこの眺めは、そうざらにある海景ではない。佐渡の景色のうちでは、豪壮の味がある。右手の入海に沿つて、小山の上まで、層々と家がつらなつてゐるのが、相川の町だ。かく云ふ自然の構造をもつた町も、佐渡ではこの町だけだ。下町と山ノ手が、はつきりしてゐるのも性格的だ。主として鑛山

で立つてゐる町だが、他國でよく見かける鑛山町の煤けた感じがしない。海と云ふものの威力の賜物かもしれない。意志的で、何か氣合ひをかけえ、身構へてゐる恰好で、文字通り武士的である。

青野が武士的と捉えた相川のまちは、単に地形的に分節されているだけでなく、その地形の分節が生活・生業面の違いにも影響を及ぼしている。つまり、鉱山都市相川の生業は、高位段丘面の上町での鉱業と、低位段丘面の下町での流通・商業という対となる構造を示し、それが目にみえる表現形となって現れている。

(2) 土地利用・都市構造の関係

土地利用の面での対となる構造でまずあげられるのが、鉱山を含む工業都市である町方と都市住民を支える農漁村という関係である(図4—29)。さらに、町方には山地の金銀山と海成段丘の市街地という関係が、村方には高位段丘面の農地と低位段丘面の居住地、もしくは低位段丘面の居住地と漁場としての海という関係が入れ子状にある。どちらにも居住の場所と生業の場という分節がみられる。

都市構造と生活・生業との関係で捉えると、町方の市街地部分は、段丘崖を隔て、高位段丘面に立地する鉱山

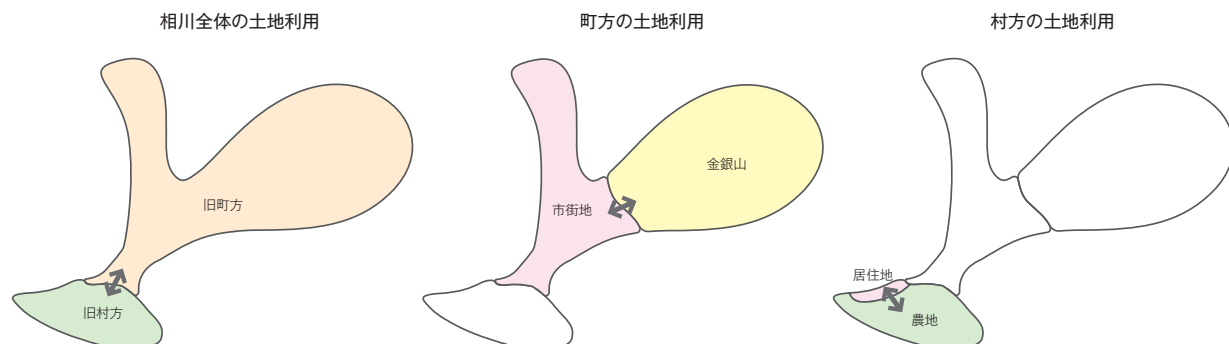


図4—29 相川の土地利用の関係

町としての上町と、低位段丘面に立地する流通・商業都市としての下町とに分かれる（図4—30）。その関係と同じく、上町には鉱山労働者の慰安と繁栄を祈願した大山祇神社が、下町には相川の総鎮守であり、海への信仰に由来する善知鳥神社が立地する。前者では鉱山祭りがおこなわれ、後者では相川祭りがおこなわれている。

さらに、上町は鉱夫が住む大工町と地役人・三菱職員中心の京町とに分かれ、下町は相川の商業と観光業を担ってきた中央部と生活関連業を中心とした両翼部とに分かれる。

このように、相川の鉱山・町場・村方は、対となる構造が入れ子状にあることに、その独自性をみることができるだろう。

(3) 近世・近代の変化と関係性の持続

近世、近代と、相川は一貫して金鉱山によって栄えて

きたが、この間、金鉱山の経営や人々の暮らしぶりが一様だったわけではない。幕府の直轄支配から三菱による鉱山経営への移行、産出量の減少、精鉱技術の近代化、都市域の拡大など、多くの変化が起きてきた。しかし、そうした内容は変化しつつも、相川の対となる構造は持続している（図4—30）。

具体的には、明治時代になり、幕府による直轄支配から三菱による鉱山経営の時代となったが、上町の中心部である京町は地役人と特権的商人の町から三菱職員の町へと、その構造を維持しながら転換している。また、下町は流通・商業を中心とした都市から商業・観光の拠点となる都市へと変化した。鉱山との間接的な関係は持続している。変化しつつもこの関係が受け継がれていることにより、景観を構成する諸要素の継承にもつながっている。

2. 段丘崖の植生の差異

上町と下町を明瞭に二分する段丘崖は、その大部分が樹林で覆われている。上町、下町それぞれに相川を構成する核となる存在であるが、この段丘崖の樹林が保持されることにより、景観上の対となる構造が保たれていることに注目する必要があるだろう。

相川地区全域の主要な植生は、環境庁による第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査により把握されている。そこで、山林の利用の観点から、鉱山及び相川市街地との関係が深い海成段丘の段丘崖に絞って、より具体的な植生調査を実施した。

(1) 段丘崖の主要植生

段丘崖の植生は、濁川—南沢間の海岸段丘と、その両側の海成段丘とで、性格に大きな違いがみられた（図4—31）。

濁川～下寺町間の段丘崖の主な植生は、濁川から長坂にかけてはクロマツ植林とクロマツ—タブノキ群落、長

坂から下寺町にかけてはタブノキ群落とタブノキ—エノキ群落となっている。

クロマツ植林は、下草刈り等の管理により維持されているクロマツの単層林で、奉行所を象徴する植生である（図4—32）。クロマツ—タブノキ群落は、クロマツ林として管理されていたが50年ほど維持管理されていない群落で、現在の状況が続く場合、早い段階でタブノキ—ネザサ群落へ遷移する可能性がある。

タブノキ群落は大安寺の社寺林で、300年生以上とみられるタブノキが極相林を構成し、林床の低木や草本類は極めて少ない（図4—33）。段丘崖を墓地として利用している場所はタブノキ—エノキ群落となっており、50～150年生の群落がみられる。森林の利用度は低いが、タブノキ群落と比較して低木や草本類が多く、樹種も多様である。

一方、濁川より北側、下寺町より南側の段丘崖の主な

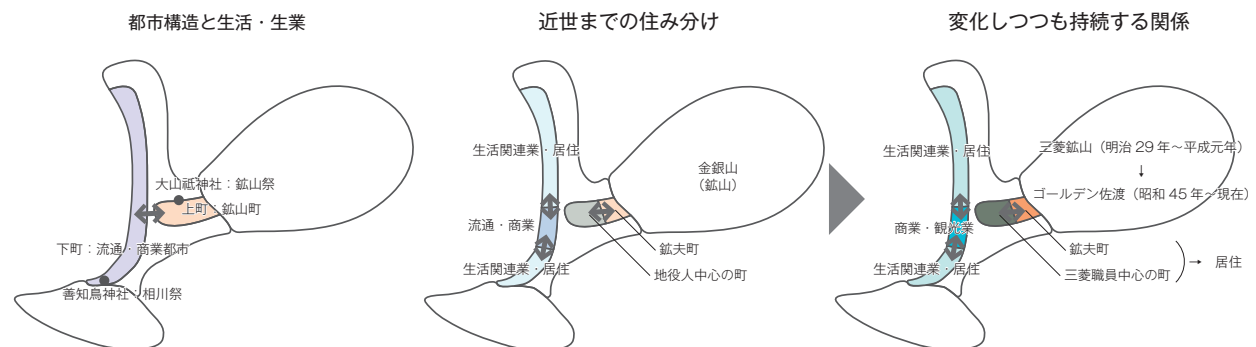


図4—30 相川の都市構造と生活・生業との関係及びその変化

植生は、エゾイタヤーエノキ群落やコナラ群落、タブノキーネザザ群落、カシワータブノキ群落、アズマネザザ群落である。エゾイタヤーエノキ群落とコナラ群落には薪炭利用の跡である株立ちの広葉樹が分布していた。タブノキーネザザ群落とカシワータブノキ群落は、「広間風」と呼ばれる海からの強い風が直接あたる北沢浮遊選鉱場西側に分布する。カシワは風衝地に強いことから、よく生育しているのだろう。50年生程であることから、昭和27年(1952)の北沢浮遊選鉱場閉鎖後からの植生と考えられる。

(2) 植生と相川の暮らしの関係

相川の中心部にあたる濁川一下寺町間の段丘崖には、クロマツの単層林やタブノキの極相林など、ひとの意思

により徹底して守られてきた植生がみられる。佐渡奉行所を取り囲むようにひとの手で植えられたクロマツ林も、寺域を取り囲むように手つかずの状態で維持されたタブノキ林も、目的は違えど両者とも「保護林」といえるものである。これに対してその両側、つまり濁川より北側、下寺町より南側の段丘崖には、タブノキやヤブツバキが所々にみられるものの、ほとんどは薪炭利用や堆肥利用できる落葉広葉樹である。「保護林」に対して「利用林」といえるものである。鉱業・商業・流通・居住の場として形成された上町や下町、段丘面での農業や沿岸での漁業を行ってきた上相川や鹿伏という対となる構造が、徐々に段丘崖の原植生を改変させつつ現在の植生へと遷移させたと考えられる。

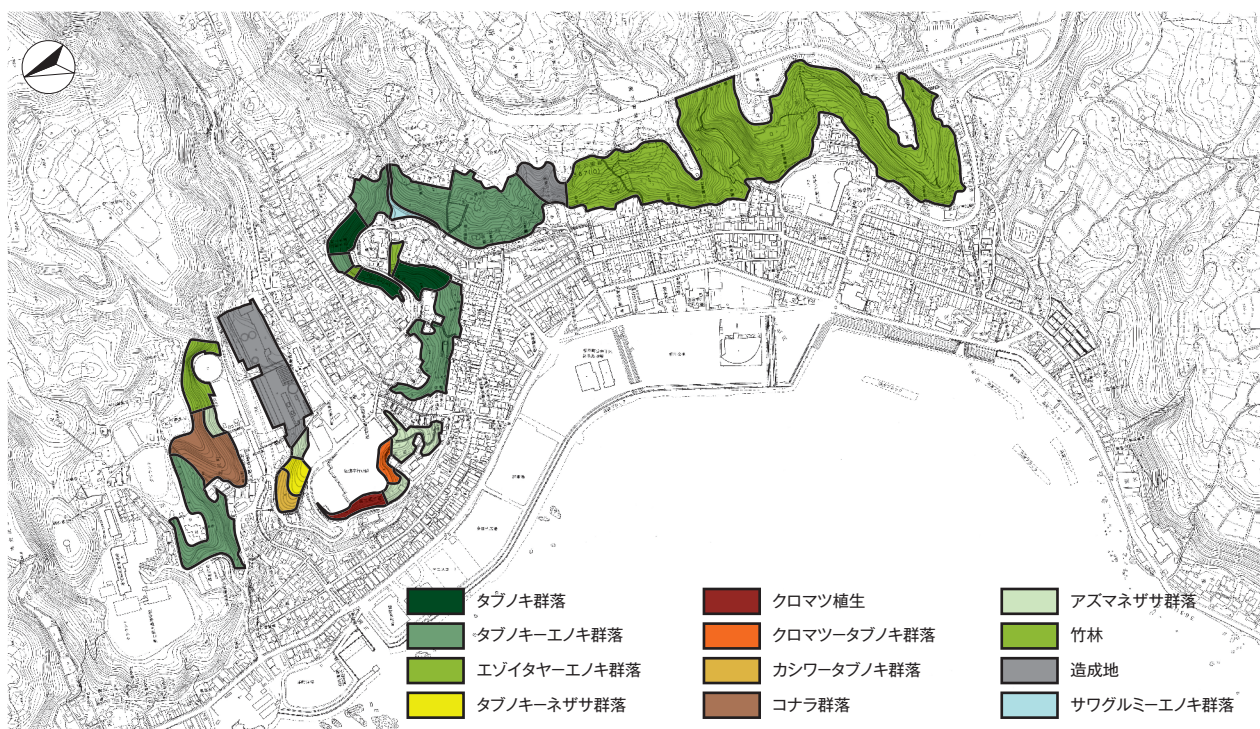


図4-31 段丘崖の植生



図4-32 佐渡奉行所下のクロマツ植林



図4-33 大安寺のタブノキ群落

3. 金銀山と漁業の関係

臨海鉱山都市であるがゆえに生まれた独特の生業のうち、鉱山・町場に関するものは第3章に、村方のうち農業（水田開発）に関するものは本章第2節に記述している。そこで本節では、鉱業と漁業との関係について考察する。

相川周辺の地域は、農作物と同じく、鉱山都市に対する魚の供給地であった。例えば、相川の鹿伏から二見までの七浦海岸は、魚はもちろんのこと、鉱山で使用する魚油も多く納めていた。

周辺に数ある漁師町のなかでも、相川に内包されてきた海士町は非常に特異な存在で、相川金銀山との関係なくしては語ることはできない町である。

(1) 海士町と新海士町の成立

下戸町に隣接する海士町は海士町川左岸の氾濫原に位置しているため、地勢的には条件が悪い土地だったといえる。この海士町の誕生に関して、『佐渡相川志』⁽⁷⁾には、

元禄七年検地元町屋敷ハ一反一畝三発酉年八月四日横尾六右衛門支配所、此所ノ海士、慶長ノ頃、石見・出雲ノ両国ヨリ戸根仁兵衛・磯西茂左衛門ニ随伴シテ来タル。始メハ一丁目辺ニ住ス。元和ノ頃此所へ移ル

とある。また、『佐渡四民風俗』⁽⁸⁾には、

海士町にて頭立候ものは当時俵物用達、磯西純平先祖茂左衛門、刀根仁兵衛先祖仁兵衛と申者、御船手役加藤孫左衛門先祖和泉、慶長九辰年大坂より召連来、追々海士稼取立、串貝等仕立、他国売買致し候処

と記されている。

これらによると、慶長9年(1604)に加藤和泉が磯西茂左衛門と刀根仁兵衛を筆頭とする海士集団、つまり素潜り漁を生業とする人々を相川へ連れてきた。加藤和泉は、慶長8年に初代佐渡奉行・大久保長安に任命されて翌年摂津国から赴任してきた2名の御船手役(官船の管理と海上運輸を管理する職)のひとりで、もうひとりは辻将監という人物である⁽⁹⁾。

当初、海士たちは一丁目あたりに住んだが、元和年間(1615～23)に現在の海士町に移住した。海士町は天明7年(1787)には18艘の小船をもつ集落に⁽¹⁰⁾、天保12年(1841)には家数23軒、人口198人になっている⁽¹¹⁾。しかし、この間、海士町の海士漁師たちは内陸の海士町

から徐々に海辺に移住するようになっていたようで、文政11年(1828)には奉行所から、

海士の儀、磯遠の場所にては不便利であるから、所々に散在しては職業の申し合わせも行届かぬので、下戸炭屋浜町の内、地所割替え、新海士町と唱え、下戸番所内居住の海士ともに引移るよう申渡した。⁽¹²⁾

と、下戸炭屋浜町の新海士町に集住するよう指示が出された。

(2) 下戸炭屋浜町の構成

海士たちが集められた下戸炭屋浜町は、相川市街地の最南端に位置する。海際に南北に細長く連なり、その中央を海士町川が西流する。近世まで海士町川右岸に下戸番所が置かれていたため、海士町川左岸にあたる下戸炭屋浜町の南側半分の土地は、番所の外側にあった。海士町川の右岸側と左岸側、下戸番所の内側と外側とにまたがる下戸炭屋浜町は、地形的にも社会的にも異なる二つの性質の土地を抱えた町だった。

奉行所からの移転令がくだる2年前に作成された文政9年の「相川町 町墨引」には、残念ながら海士町の墨引図はないものの、下戸炭屋浜町の状況は知ることができる(図4—34)。この時の下戸炭屋浜町は家数64軒で、その内容を職業別でみると、海士漁師⁽¹³⁾19軒、漁師11軒、日雇取8軒、針仕事6軒、百姓3軒、拝領地2軒、海士1軒、その他14軒⁽¹⁴⁾とわかる。2つの拝領地は御船手役の辻家(西側)と加藤家(東側)の船手屋敷であって、それぞれの敷地のなかには各家と御船水主15軒があった。こうしてみると、下戸炭屋浜町はそもそも、大部分が海にかかわる人々によって占められていた町だったとわかる。

さらに、その約30年後の安政5年(1858)に作成された「安政五年十月 屋敷帳」には、下戸炭屋浜町のなかに下記の記述がある。

宝暦以前切畝歩	
町役目式歩	当持
〈表口式間／後江拾七間〉壱畝四歩	刀根仁兵衛
右同断	
町役目壱軒三步	当持
〈表口拾貳間／後江拾七間〉七畝三步	同人

下戸炭屋浜町に間口14間、奥行17間の土地を所有する刀根仁兵衛は、慶長9年(1604)に相川にやってきた海士頭のひとりである。この敷地は、文政の墨引図では17軒ほどに割られているが、当時から刀根仁兵衛の土地だったと考えるのが妥当だろう。なお、「安政五年十月 屋敷帳」の地割復原については第5章第1節(2)に詳しく、下戸炭屋浜町の復原図は第5章の安政の復原を参照されたい。

(3) 新海士町の位置

文政11年(1828)に生まれた新海士町には、下戸番所より内側(北側)に住む海士たちにも移住の指示が出された。つまり、新海士町は、下戸炭屋浜町のうち、下戸番所より外側(南側)のエリアに形成されたということになる。

また、嘉永6年(1853)に新海士町の重立から海士町宛に送られた刀根清六家文書⁽¹⁵⁾にも、新海士町に関する手がかりがある。そこに記されている重立の名は、順に、「喜八」、「五郎吉」、「茂市」、「徳兵衛」、「新三郎」、「徳次郎」、である。

これを「安政五年十月 屋舗帳」と照らし合わせると、下戸炭屋浜町の一番南側の区画に、南から順に、「季八」、「五郎吉」、「茂市」、「善兵衛」、「新三郎」、「篤次郎」と、刀根家の文書とほぼ共通する名がみられ、この一区画が新海士町と考えられる。

さらに、この各敷地を文政9年の「相川町 町墨引」と対応させてみると、「季八」と「藤八(畑百姓)」、「吾郎吉」と「市郎兵衛(百姓)」・「幸次郎(百姓)」・「幸七(漁師)」、「茂市」と「茂市(海士漁師)」、「善兵衛」と「善兵衛(海士漁師)」、「新三郎」と「新三郎(海士漁師)」、「篤次郎」と「覚次郎(海士漁師)」と、すべてに対応が付けられた。

文政9年の段階では百姓の市郎兵衛と幸次郎、漁師の幸七が住んでいた土地に、安政5年(1821)には五郎吉が住んだ。五郎吉の名は文政9年の「相川町 町墨引」ではその北側の区画にみられたが、「安政五年十月 屋舗帳」ではそこに幸次郎と市郎兵衛の名が現れる。これは、前出の文政11年に下戸炭屋浜町の出された海士の地所割替えの結果と考えてよいだろう。

(4) 海士と長崎俵物

鉾山都市である相川に新海士町がつくられるほどまで海士が増加したのはなぜだろうか。

相川へ来た海士たちは、採取したアワビを串貝(串に刺して干したアワビ)に加工し、それを他国に売って生計を立てていた。そうしたなか、元文5年(1740)に元佐渡奉行である荻原源左衛門(佐渡在勤1732～1736年、

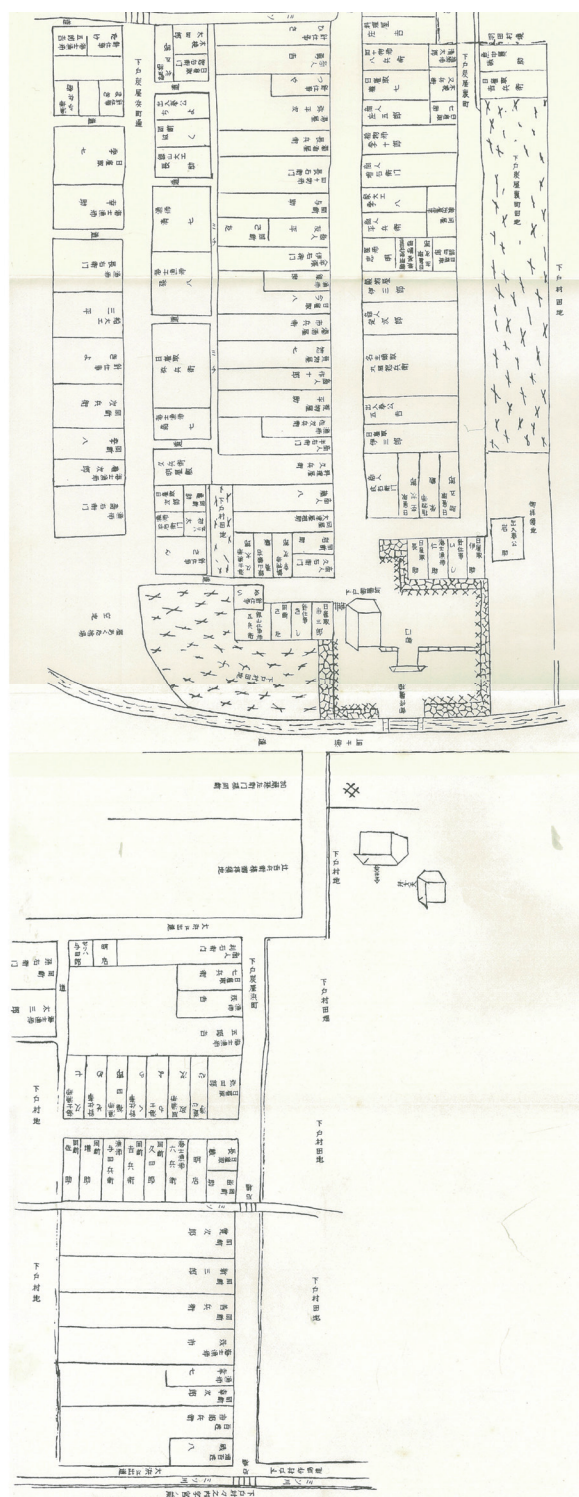


図4-34 文政9年(1826)の下戸炭屋浜町

当時長崎奉行)の指示により、長崎での中国貿易の決済に佐渡の干鮑を「長崎俵物」として用いることになった⁽¹⁶⁾。

元文5年に請け負った干鮑は2,000斤で、その年の5月から9月の間に採取・加工し、翌年の寛保元年(1741)から長崎での決済に当てられるようになった。さらにその6年後の延享4年(1747)からは煎海鼠(ナマコを茹でて干したもの)も輸出するようになった。この2品に

については宝暦3年(1753)には長崎俵物とする以外、自他国とも外売りが禁止された。そして同13年から金銀の輸入が開始されると、幕府は俵物を銅とともにその決済にあてたため、俵物の重要性は決定的となった。取扱量は徐々に増加していき、宝暦の頃の請負量は7,000斤だったものが、明和2年(1765)には1万斤にもなっている。

その長崎俵物の製造と出荷を一手に担ったのは、海士町の海士頭だった磯西茂左衛と刀根仁兵衛で、両家は現

在も海士町に住み続けている。なお、磯西家(屋号：清三郎)は大日堂の代表役員を担っており、海士町のまとめ役となっている。

このように、海士町の在り方からは、鉾山・町場と村方は対の構造で捉えられるということだけでなく、特異な相互補完関係で結ばれてきたことが読み取れる。そうした無形の側面が、この独特の都市文化のあり方の根底をなしているといえる。(恵谷浩子)

第4節 小 結

すでに第2章においても指摘されたように、相川は海成段丘に規定される地形構造が特徴的である。そして、その段丘面を巧みに利用して、土地利用がなされてきた。このことは佐渡相川の鉾山都市景観を考えるうえで重要な点である。そうした点を踏まえ、本章では相川における土地・空間利用、及び農地の構造及び薪炭林の利用について分析をおこなった。あわせて、空間の関係性についても検討した。

近世初期に成立した相川の都市構造の骨格は現代に至るまで概ね継承されている。明治時代の相川の土地区画も、道路に沿った短冊形の地割が連続したものである。また、海成段丘の段丘面は、その平坦さゆえに宅地として利用され、斜面地は山林や畑、寺院敷地などとして利用されていた。段丘面は地割が密に分布しているのに対し、斜面地では比較的大きい。

昭和の大増産に際しておこなわれた浜石採取や道路拡幅の影響によって、海岸沿いの明治期の地割は大きく変化している。こうしたことも、鉾山都市における生産活動と土地利用の関係を考えるうえで重要である。

土地利用や地割が現代に至るまで継承されるなかでは、地目が宅地である土地が空地や駐車場になっている事例が多く確認された。相川の人口減少と対応し、土地利用の在り方が徐々に変化してきていると考えられる。

以上のような、町場の動態とあわせて、鉾山都市への食料供給を支えた近郊農漁村の動態も重要である。ここでは、近年まで盛んに水田耕作がおこなわれていた下相川と現在でも耕作が継続されている鹿伏の2地区の土地利用と水田経営の歴史の変遷が分析された。両地区とも海成段丘上で水田開発がおこなわれ、溜池と水路による水利システムが採られている。

鹿伏地区は元禄期にはほとんどが畑地であり、一部の湿地などで小規模な水田耕作がおこなわれていた。その後、近世初頭の入植者による開発によって、一部で新田開発がなされた。さらに近代に入ると、大規模な溜池が

整備され、現在のような一面の水田へと変化したことが明らかになった。

このように、鉾山都市相川の変遷と呼応するように、近世から近代にかけて水田が展開し、現在でも各時代に造られた溜池や水利システムが継承されていることは、鉾山都市景観における重要な価値を含んでいる。

以上のような町場及び村方における土地利用の在り方を踏まえて、鉾山・町場・村方における空間の関係性についてみていくと、海成段丘という相川の地形的特徴とも深く関連しながら、都市構造及び生活・生業の両面において、対となる関係を形成してきたことがわかる。

例えば、こうした対となる関係性には、高位段丘面に成立した鉾山町としての上町、低位段丘面に成立した流通・商業の町としての下町の関係性に代表される土地利用などがあげられる。これらは核となる具体的要素は変化しつつも、本質的な性格は、近世から近代、現代に至るまで時代を超えて持続されてきた。

また、対となる関係性は段丘崖の植生においてもみられる。二次林と保護林の関係性である。周辺農漁村では薪炭や堆肥としての利用が可能な落葉広葉樹へと変換し、循環的な利用がなされる一方で、町場のなかでも奉行所周辺では奉行所を象徴する植生であるクロマツ林が、大安寺を中心に寺町周辺では相川の原生木であるタブ林が、それぞれ保護されてきた。植生が、人間による土地利用と密接に結びついてきたことが読み取れる。

このように、都市に内包される様々な機能が分節化され、分節間の関係性によって成立してきたのが相川である。そして、その土地利用は、近郊農村部を含め、一貫して海成段丘に規定され、また鉾山の盛衰とともに、全体の土地・空間利用は変化してきた。だが、その変化は、積み重ねられてきた機能の一切を消し去るものではなく、鉾山都市に規定されるパラダイムのなかで一貫して持続してきた点に鉾山都市としての特徴の一端をみいだせる。

(奈良文化財研究所景観研究室)